「御〜様」表現の史的考察：「ねぎらい」表現の変遷から

宅間，弘太郎
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9375

出版情報：語文研究．88，pp.45-58，1999-12-25．九州大学国語国文学会
バージョン：published
権利関係：
「御様」表現の史的考察

一 はじめに

ねぎらいや遺遺の表現として、現代日本語においては「御様」はどちらも、日本語の中でも代表的な敬語表現である。前者は種々の語に接し、その語の指定者や所有者を高めた、丁寧な言い方を表現するものである。また後者も、上位者を直接言語表現するのを避けるという敬語表現の原理によって、主に人物を指す語の後に接し、敬意を表する用法を持つものとみられる。故に、「御様」という表現は、基本的には人物（あるいは人格を持つもの）をきわめて高く待遇する敬語表現であるということができる。
二、二、基本的用法

（1）示した用例について見ると、御様の付された語は、「父」・「母」・「姉」など、直接に人物を示す意味を持ち、尊敬形の用法としてポピュラーな用法であり、これが御様の基本的な用法である。（2）示した用例について見ると、内裏、出部屋、などの語に御様が付してい
る。これらの語は第一義的には人物を指し示す意味は持たないが、いずれも当該の場所に存在・居住する人物を間接的に示し、結局はその人物を高く待遇している。よってこれらも

二、三、特殊用法

特殊用法とは、最初に示したように、敬意・気遣いを

聞き手に表現するために特化した御様形表現である。

これらのお表現は、いまだよりも先述した基本的用法の

ように、人物を高める意味を担うことにはない。基本的用法に

て用いられるものの、人格を保持し動作として用いられるのに対し、特殊用法の御様は、何かの応答用語として、独立的に用いられるものである。

おたがいさま（御手伝いさま、ちとさま）（御馳走様）

ごしゅようさま（御縫う様）（ごくろさま（御苦労

様）まちどさま（御待つ様）（御世話様）

おあいにさま（御生憎様）（おきのどくさま（御

気の毒様）おまもじさま（御待遠様）（御世話話

様）ばかりさま（御世話話

様）以上は、逆引き広辞苑から、特殊用法として認められる
三「御じ様」表現以前のねぎらい表現

資料を調査してみて感じたことは、予想以上に「ねぎらい」表現が時期の表面から表れていた。そこでこの表現の数値をもとに考察を行った。

三世・近世の口語資料を調査し、対話形式の多様性を観察した。特に近世後半以前の表現は、下手に読みやすさが求められていたということである。しかし、表現の特徴を明確に識別することができなかった。
三、近世期前半の「ねぎらい」表現

以上の様々な状況があったことを考慮し、ここでは近世期前半の「ねぎらい」表現を見てみたい。以下に例を掲げるが、口語の世界ではねぎらい表現として「御苦労（大儀）」などどの表現が中心として用いられていたようである。より頻繁に、そして広く用いられていたと思われるのが「御苦労」であるが、「御」がつくか否かも、単独ではねぎらい表現として丁寧さに欠分であっただろう。以下の通りに近世期御苦労千本

「これは君が久しく薬師寺様、ひよきの事が出来ました。おまえへも御くらえ。班のど向けは私、...」（東京

「先以今日の御復詣文を私らぬ私の。近町御苦労千万」（清

水寺任僧 常邊東門

『新義三鶴物語』 宏保元（十四）（竹田・並木）
此度娘薄雪と。園辺の左衛門に御せんき有て。只今
皆々来られつ、しんで承れ。民部殿大膳殿御苦労さる、
いざ先つへ（伊賀守・民部大膳・新之助・小物語）
寛保元（一七四）（竹田・並木）

【御上使様は、御苦労千万に存じ奉り升る（佐々木丹
右衛門）管領細川義政元の妻・浜町
伊賀越掛掛合羽安永五（七七）（半二・江戸）

関連するものとして、【御隠】【御世話】などの用例も掲げ
【芦屋道満大内籠】享保十九（三三四）（竹田・並
木）

お前は、年中お世話に成してこざり升る。それゆ
久世期後半以降と思われる。以下ではその用例について検討
したい。

四【御名様】発生以降

先に述べたように、特殊用法の【御名様】が発生したのは、
近世期後半以降と思われる。以下ではその用例について検討
します。今回調査した資料の範囲で、どのような語句に【御】
様】が接した例が見られたか、その連用形を掲げる。

明治時代【藤】【苦労】【世話】【かげ】【機嫌】【退屈】【嬉

— 49 —
大正時代

退屈：「勿々」「粗末」「楽しみ」「愁傷」

草臥：「たびれ」

退屈：「駄走」「粗末」「楽しむ」

藤原：「世話」「生憎」「気の毒」「待つ」

特別用法の「駄走」が登場してはじめるのは、十八世紀後半の時代からである。今回調査した資料の中で、特にその用法が多かったのは、町人の日常会話の形でとり

四、五、近世期後半の状況

四、退屈：「駄走」「粗末」「互い」

御苦労様

仮にない時でも、文言な私、顔見世の口上なら

御苦労様なから、夫なと書て置かって下さりませ。（大尾の

○イヤ、そぶでない。此様に風が吹き、此方も随分

『落書き』に於て延らねばならぬ。○〇レハ（大喜に御苦労

精に入れて延らねばならぬ。○〇レハ（大喜に御苦労

五介が生出された。○〇代

五介飛出、レハ（旦那様。お勝手なれば御苦労

前半が延らしてござる。此際私は延らせて行かぬ。もぶかなた御無用

の日本語なさいませ。（二代・五助）旦那

【慶山新製曲雑号】二・用心蔵

寛政十一（八〇〇）

波流：池内八兵衛等板

【鷹揚雑話】四・大尾、乍懐口上、寛政七（二九五）

【御世話様】

京：菱屋孫兵衛等板

大正時代

退屈：「勿々」「粗末」「楽しみ」「愁傷」
御退屈様
ついて此頃八芝居通が、はまるね役を悪目だけひや
すが、そこからでた通言だらうねやう。「時に今
の高視やの役八、チトはまらねへぢやアいか、
わたしもううかいいもの、へイ、御たいくっすま（若者
観物人）

四、三
明治・大正期の状況

明治・大正時代になると、御ノ様表現については、用例の頻度や、接続する語彙の幅広さなど、ほぼ現代と同じ様相ということが出来そうである。

御苦労様

主は雑誌を拋げ出した。
「では行くかな。とうとう引張出された」

御苦労様」と野々宮さんが言った。女は一人で顔を見
合せて、他に知らない様な笑を漏らした。庭を出ると、

御苦労様の毒様

「私は姉様に成代ってお世話をしたのです」と口真似
をして、「そう、姉様に成代って飛んだお世話をしてく
れたのさ。私はね、お礼を言うよ。お薦様で亭主一人形
にしてしていいました」と間を置いて、口惜しそうに、

「なんて欲しぎゃ、くれてやるから、何処へなと連れて
まえ！（時子・小夜子）

「其面影」二葉亭四迷、一九〇六

女が一人ついた。（野々宮・広田先生）

成程、いや、お茶も差上げませんで失礼ですが、手間
が取れちや又お首尾が悪いと不可ません。直ぐに、是か

何うぞ然なすって下さいませ。さあ、御苦労様ご
う。（道子・早瀬）

御苦労様に成代ってお世話をしたのです」と口真似
をして、「そう、姉様に成代って飛んだお世話をしてくれ
ったのさ。私はね、お礼を言うよ。お薦様で亭主一人形
にしてしていいました」と間を置いて、口惜しそうに、

「なんて欲しぎゃ、くれてやるから、何処へなと連れて
まえ！（時子・小夜子）

「其面影」二葉亭四迷、一九〇六
女が帰って行くとき、お島はいきなり帳場の方から顔を
出しに行った。
「お気毒さまですが、宅はお花なんか習っている隙は
ないんですから、今日はきゃからお断りいたします」
お島は硬かった神経を、強いておさえるようにして、
そう言いうながる詰礼金の包を前においた。（お島下女）
「あらくえ」と徳田秋声、（人名）

【特別に】

御生憎様

源さ、お入りや。なんだって障子の外からなぞ覗く
と声を掛けましたのは鹿の湯の女亭主です。源は映けた
障子を開けて、あっと蒔さめた顔だけ顔しながら、
「私は女衆ばかりかと思って」
「女衆ばかりかと思って」
源

（乗車）

御待ち遠様

まあとっていらっしゃいよ。美しくい髪ですね。腰ま
然し美人ですね。おいで御見せと云ったら、大抵ににして見
せるがたい」と主人は大急い込んで細君に食って掛

する。へえ御待遠さまたんと御覧遊ばせ」と細君が鉛を

主に渡す時に、（細君下主人）

吾輩は猫である。六 夏日漱石

【特別に】

御退屈様

奥さんこの猫は油断のならない相好です。昔の
草紙にある猫に似ていますよ」と勝手な事を言いま
がら、頚りに細君に話をしかける。細君は迷惑そうに針仕
事の手をやめて座敷へ出てくる。
「どうも御退屈さま、もう帰りましょう」と茶を注ぎ易か
って迷亭の前へ出す。「どこへ行ったんだか、どこへ
参るにも断わって行った事の無い男ですから分かりま
すか、大方御医者へでも行ったんだしそう」（細君下細

（吾輩は猫である）。三 夏目漱石

【特別に】

御道理様

哲也に短を截めて、君も余程邪推深いねえ。あれ程僕
がそんな事はないと言ってるじゃないかな。そんな乱倫な
大抵考えてても分かりそうなもんだ。
特殊用法の「御様」の成立のきっかけ、および変遷についての考察を行いたい。

五、一「御様」表現発生の要因

特殊用法「御様」発生の要因として、次の二つの要因が考えられる。

（一）敬意通減による、敬語接辞の添加、ならびに「様」

特殊用法「御様」発生前の用例として、主に、近き身の者を敬語通減された形で表記される。「御様」が発生したときの敬語通減の要因として、敬語通減の通減で表記される。「御様」が発生した理由として、敬語通減の要因をみればならない。

五、まとめと考察

（二）人称指示効果

特殊用法「御様」発生の要因として、主に、近き身の者を敬語通減され、さらに「様」を付け加えた形で表記される。「御様」が発生した理由として、敬語通減の要因をみればならない。

特殊用法「御様」発生の要因として、主に、近き身の者を敬語通減され、さらに「様」を付け加えた形で表記される。「御様」が発生した理由として、敬語通減の要因をみればならない。
では受け入れられるものではない。それぞれ根本的には、異なる意味機能を持つ言葉だからである。基本的には（一）で掲げた理由により「様」付加の契機が生じた。しかし同時に、「様」付加によって必要十分な丁寧さを帯びることなく、表現の本領である。ある人物を言語的に高く待遇する、基本的用法（尊称用法）の「御く様」は、聞き手以外の第三者を示し、高く待遇することがもちろん可能である。しかし特殊用法（称尊称用法）の「御く様」は、主に目的に存在する聞き手に対して用いるのであり、目的前にいない第三者への尊称用法としは解釈できないことからも、このことが認められるのである。

新表現「御苦労に存じます」「御苦労で御座います」

旧表現「御苦労在下ます」「御苦労で御座います」

「言き手への気遣い」というのが特殊表現「御く様」

五之二「御く様」表现の定着

登場以来現代にいたるまで、特殊用法「御く様」は、相手へのねぎらい・気遣いを表す表現として日本語に定着してきている。新しい生活を伴う新しい表現として「御く様」表現は話し手によって恣意的に選べる表現形式であり、その選択理由としては、上記のように、聞き手への気遣い表現を人称指向性の強い「様」を用いて行う、もしくは身近なものに、より簡便に気づか気持を伝えられ

この「言き手への気遣い」というのが特殊表現「御く様」
この略語を取り扱った特殊用法「御様」は、「御」と「様」という日本語の代表的な敬語接辞を用いた表現でありながら、非常に詰まった表現に見えますが、したがって表現されているものです。特に現代語においては、挨拶用語として十分浸透した敬語接辞用法から発生した、一つの用法として考えた。

この略用法を用いることで、近世後半の日本語における敬語の多様性を表すことができる。この時期に「御様」と表現が使われている。そして現代にわたって広く用いられていること、表現が見られることが多く、長い間使われてきたものであると考えられる。

注 1 ここで「特殊用法」という略語を用いるのは、「御様」と「様」を含む「基本的用法」を参照して発生したものであることを意味する。また、挨拶用語としての体系を構成したものはあくまで見られるべきである。

2 いずれの略用法を用いるべきか、意図が分かれることで、それを言語学的で表現することができる。